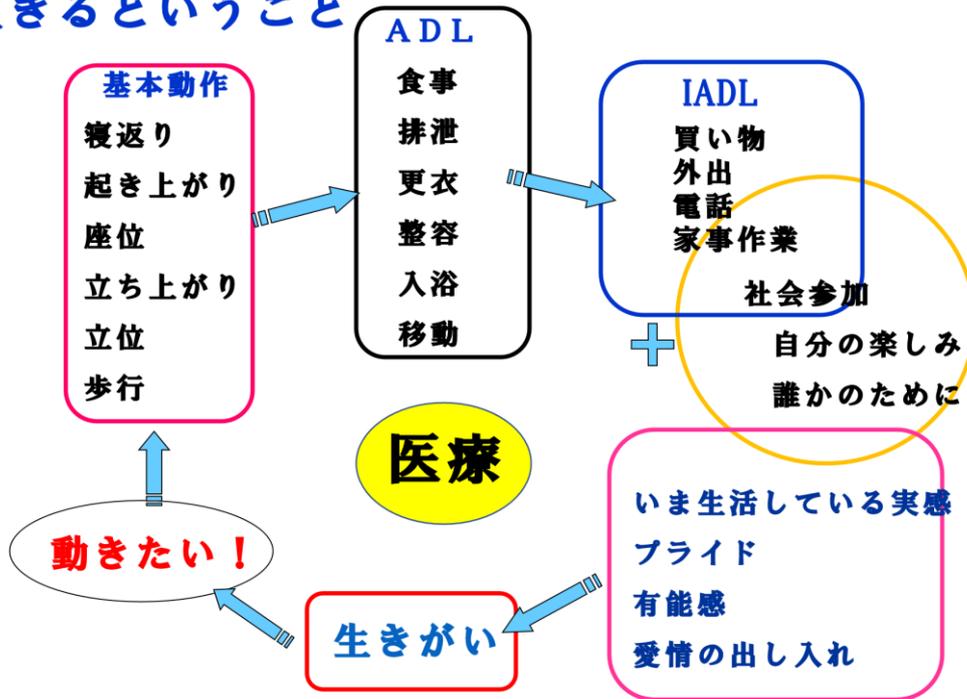


2-4. 生きることを支援する

24時間、365日、毎日がリハビリです。
楽しいが前提です。

生きるということ



わたしたちは日常生活の中で何の疑問もなく、横になれば寝返りをして、起き上がって、座ったり、立ったり、歩いたりと言うことを繰り返しています。

しかし思い出してください。通常の発達では生まれてから一年の年月をかけて、立って歩けるようになります。そして安定して歩けるようになるまでは、その後、三年、四年とかかります。これだけの時間をかけ、基本動作をが身につけていきます。

基本動作が身につくことと、次のステップとしてADL（日常生活動作）を身につけていきます。食べるためにしっかりと座り、手を動かす。手づかみから始まり、スプーンやフォークを使えるようになり、箸を使いこなします。着替え、トイレに座ること、顔を洗ったり、風呂に入ったり、行きたいところに行くというように日々の生活が一人でできるようになります。そして身の回りのことが自分でできるようになります。

自立した生活ができるようになると、外の世界、社会とのつながりと深めていきます。IADL（手段的日常生活動作）と言われるもので家事作業や友達に電話をかける、公共機関を使って外出するといった社会生活が送れるようになります。

社会生活、つまり社会参加や社会活動を営む中で所属の欲求が満たされ生きている実感・プライドが持てるようになっていきます。

人生はこのサイクルの繰り返しです。成長期でも、成熟期でも、老年期でも。そして終末期に向かう時にもこのサイクルを回ろうとします。このサイクルが回っているときに、わたしたちは生き甲斐を感じます。尊厳を実感できます。

ひとたび、病気や障害によってこのサイクルに支障が出ると、人はその回復に注力します。元に戻そうと努力します。

たとえ元の状態に戻らなくても、プライドを持って生きられるように、尊厳を持って生きられるように、もがき、苦しみ、そしてどこかで病気や障害と折り合いをつけて生きていきます。

わたしたち医療や介護に携わる者は、病気や障害によって生きがいがなくなりそうになった人に、この生きている実感・プライドを持って生きていけるように利用者・患者を支援することが仕事です。